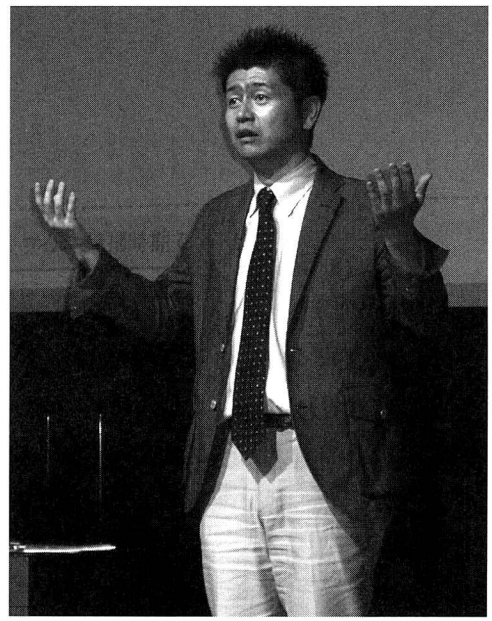
記念講演「未来を拓く聾史研究」

講 師　筑波技術大学準教授　大杉　豊

プロフィール

東京都出身。先天性高度難聴。国際聾史学会元理事。
東京教育大学附属聾学校（現筑波大学附属聴覚特別支援学校）に学ぶ。小学部三年より一般校で健聴児に混じって学校生活を送り早稲田大学に進学するも、情報コミュニケーション保障の問題で中途退学。
演劇や手話指導などの活動を経て、1990年に「ダスキン障害者リーダー育成海外研修」第10期生として渡米したのをきっかけに、翌年ロチェスター大学に留学。
言語学を専攻して1997年に博士号取得。同大学での教職を経て2000年に帰国。全日本ろうあ連盟本部事務所長として、六年間にわたりろう者の諸権利～手話を使う権利など～の保障をめざすろうあ運動を支える。
これらの経験を活かし、2007年4月より筑波技術大学で聴覚障害学や手話学の研究・教育を通して、聴覚障害を持つ学生の指導にあたっている。



ただ今紹介いただきました大杉豊です。よろしくお願いします。日本聾史学会設立10年目ということで10年間の研究の積み重ねがあったことは大変素晴らしいし、そして大会も10回開かれてきたこと、併せておめでとうございます。いろいろと準備が大変だったと思いますが、地元の実行委員の皆さん本当にご苦労様でした。今日はすばらしい機会に呼ばれまして本当に嬉しく思うと共に緊張しています。

ここでは『未来を拓く聾史研究』というテーマでお話ししたいと思います。やはり世界にひらく鍵は、これからの子供たちのために学んで欲しいということでこのテーマにしました。この前までは国際聾史学会の理事を２・３年やっていましたが、年に１・２回会議をする程度でした。まだまだ活動は浅いのですが、本を読む、また、私自身が10年間アメリカで生活した中で、アメリカやヨーロッパ各地でたくさんのろう者から聾の歴史を学ぶ機会に恵まれました。今春４月から筑波技術大学で仕事を始めました。ろう者や難聴者の学生がたくさん学んでおります。たくさんの学生に教えながら、聾歴史はとても大切だということが分かってきました。

『ろう者としての歴史の考え方』これは伊藤政雄会長が考察した文面です。聾歴史とは何かということを学生からもいろいろ質問されます。そういった質問に対して答えることで、何度もこの考察文面を読み直して歴史とは何かと振り返ったりいろんなことを考えたりしています。

伊藤会長の『ろう者としての歴史の考え方』というのは私も大変好きな言葉で、今の様子を理解する、今までの歴史を振り返るということ、自分自身が誰かということをわかるということが必要だと思います。そして、ろう者の生き方などをいろいろ学んでいくことも大切だと思います。それを伊藤会長が「歴史を研究する理由」として書いておられます。私もその教えに学んで少しずつ努力をしています。

そこでイメージを作ったのですが、大切だと思うことは三つあります。まず「歴史」、二つ目は「想像力」、三つ目は「正義」ということです。この三つのつなぎ合わせが重要だと思います。以前、全日本ろうあ連盟の事務所に勤めていたときに全国のろう者の仲間と運動をやってきました。その前は大学でいろいろ研究してきました。私自身が体験した運動と研究を結び付けた、私なりのイ

メージです。まず、歴史や先輩から学ぶということです。何か問題が起きたときにどういうふうに解決していけばいいのか、どのようなやり方をしたらいいのかを皆で話し合う、その中から解決の方法を見つける、というのが二つ目の「想像力」です。そして問題を解決していくために仲間と一緒に運動を広げていくというのが「正義」。これが従来のろうあ運動であるし、21世紀のろうあ運動の形でもあると思います。

これらを実行するのはわれら人間です。例えば、聾学校の校名が変わるかもしれないし、手話通訳の有料化や人工内耳の問題など様々な問題が出てきています。

そういう時は、みんな集まって結束していろいろ話し合いをして解決方法を見つけるということです。実際やるときに問題があったり壁にぶつかったりすることもありますが、間違えないようにするためには歴史から学ぶということが非常に大事だと思います。以前のやり方にも間違いがあったかもしれません。それも一つの学びなのです。いろいろな取り組みがあるのです。

実は、アメリカから帰国した後、日本ですぐに大学の教壇に立つつもりだったのですが、全日本ろうあ連盟から仕事をしてほしいと頼まれたのです。ろうあ運動に携わって6年。もし、そのまま大学に行ったらこういうイメージは思い浮かばなかったかもしれません。

私が歴史を学ぶ原点といえばこの新聞です。昭和25年、57年前に岡山の聾学校寄宿舎が火事になった記事です。16人が焼け死にました。なぜこの記事を選んだかと言いますと、エピソードというか私にも関わりが深い内容だったのです。この火事がなかったら私の妻は生まれなかったんじゃないかということです。私の妻は聞こえるんですが、妻の両親はろう者で岡山の出身なのです。

父親が火事のときに寄宿舎にいたのですが無事に逃げることができたのです。その時は母親はまだ聾学校に入っていなかったのです。ずっと山奥で生活していたんです。翌朝、新聞を見たらこの火事が載っていたのです。それを家族が、聾学校があることが初めてわかったのですね。

耳の聞こえない子供たちが集まって勉強しているということを初めて知ったわけです。山奥で生活していましたから、そういう聾学校を知らなかったのです。16、17歳の姉がいましたがこんな年齢では手遅れですが、一方妹の母はまだ6歳だったので今なら間にあうということで、翌年4月に聾学校に入学したわけです。そして寄宿舎で育ったのですが、父と出会って二人から生まれたのが私の妻ということです。

ですからこの新聞記事は非常に僕には関係があるわけですね。この話については、父から何度も繰り返し話を聞いているので良く覚えております。亡くなった方たちもいますし、逃げるときに二階から飛び降りて怪我をした人もいたそうです。母は小学一年生で6歳のクラスでした。本当なら同年の児童ばかりですが、当時は15歳の人がいたり12歳の人がいるというような状態でした。この火事がきっかけで各地から子供たちを親が連れてきたので、年齢はまちまちでした。このような話は他の聾学校でも聞くことですよね。

今度は2003年の記事です。ほんの4年前の記事です。岡山の火事から50年もの期間が過ぎたにもかかわらず、ロシアで同じような悲しい事件が起きたわけです。50年といえば文化・技術は進んできた、聴覚障害者への理解も深まってきた、そんなはずなのにこんな悲劇が起きました。焼死した生徒の数は28人です。たくさんの生徒が亡くなりました。

日本で起きたこと、ロシアで起きたこと、場所は違いますし情報の交換はなかったと思いますが、それは各国のろうあ連盟とロシアろうあ連盟がきちんとつながり、更に世界ろうあ連盟あるいはろう者皆が力を合わせていればこのような悲しい事件は起きなかったかもしれませんね。そのあたり、まだまだろう者と世界の関係が弱いと感じています。日本で起きた火事でもちろん鐘はならしていたと思います。

寄宿舎の一階には視覚障害者が住んでいました。視覚障害者は火事を知らせる音を聞いてすぐに逃げたのです。しかし、2階にいたろう生徒は全く気づかなかったのです。気づかないまま火事に巻き込まれたことになっているわけです。ロシアははたしてどうでしょうか。ロシアにはもちろんサイレンがあります。ですが、ろう生徒は亡くなっています。校長先生は、きちんと避難訓練はした

と言っています。サイレンの音に気づいて逃げることができたという答えだったのですが、皆さん訓練のことを想像してみてください。多分訓練の時には補聴器をつけていたと思います。補聴器をつけたままサイレンに気がついて逃げることができたのです。

しかし、実際聞こえない人たちは寝るときに補聴器をつけて寝ますか？補聴器ははずして寝ますよね。補聴器をはずして寝るろう者は多いです。ですから火災報知機の音は十分伝わってないことは明らかです。健聴者はそんな事は見たこともないわけですから分からないですね。当たり前のことです。聞こえる人から見ると「聞こえない人は補聴器をはずして寝るの？」と思うわけです。

人工内耳を付けている方もだいぶ増えてきました。彼らは手術をして中に埋め込まれた装置で音を聞くわけですが、寝るときはデコーダーをはずして寝るわけです。そうするとろう者と同じで音は聞こえないのですね。そのあたりについてはろう者たちも知らないことです。

健聴者はもちろん知らないことです。健聴者は簡単に「火事が起きたことに気づけないのなら補聴器をつけて寝ればいいじゃないか」と言いますけれどとんでもないことです。電池代はどうなりますか？すごくかかりますよと請求したくなりますね。それに、補聴器をつけたまま寝ると雑音が聞こえてきて寝られないわけです。

結局、ろう者を知らない人が言っていることなのです。50年間の歴史のことを考えると、人間は平等という考えが謳われているにもかかわらず、いざ何か問題が起きた時ふたを開けてみると元は変わっていないのです。基本が変わっていません。

新聞は歴史の確認につながります。寄宿舎で火事が起きた、そして何人もの人が死んだという見出しは本当に悲しいけれども、ろう者は耳が聞こえないから火事に気づくことがなくて、たくさんの人が死ぬという一つの史実ですね。また同じ事件が起こらないようにするためにどうしたらいいかろう者が考える必要があるわけです。

健聴者が今考えていることは何かと言うと、聞こえないのなら「におい」で気がつく装置があればいい。まじめな話です。国から消防庁に補助金が出ていて、研究が進められているのです。においをいろいろ作り、これが火事のにおいでいいかな？という研究をしているのですよ。これで気づくことができるかな？というような研究を続けているのです。そのような機械を考えているのですが、結局それが本当に聞こえない人に通用できるでしょうか？「におい」でわかるだろうと想像するのは健聴者の考えです。

ろう者はそんな事考えませんね。例えばろう者なら光であるとかバイブレーション、あるいは枕が揺れるとか、どこかが大きく揺れて火事を知らせてくれるのが一番わかりやすい。本当はきちんと「光や振動によって火事を知ることのできる方法を考えて欲しい」と社会に訴えていくべきなのですが、まだまだ訴えている力は弱いわけです。ろう者の権利として認めて欲しいということを運動として表明、訴えていくべきなのです。先ほどいいました、「歴史」「想像力」「正義」のつながりはこういう形にあるわけです。

安藤理事長が４年前に「手話コミュニケーション研究」という本に障害者の歴史について執筆されたのですが、やっぱり障害者の歴史をひもといてみると、はっきりと以前の社会では障害者の権利は認められていなかった、差別的な見方などを社会は容認していた、そういう状態が長い間行われていた、と述べています。

私・大杉が前に試験的にやったのですが、研究したことを一つ紹介します。山地彪（やまじたけし）さん。私、渡米前に英語などを勉強して大丈夫だと確信して渡米しました。更に向こうでアメリカの手話も覚えました。それでアメリカの生活を無事に終えましたが、滞在中に日本人の山地さんにお会いしたのです。1934年生まれ（昭和９）戦前生まれの方ですが、大阪市立聾学校の高橋潔校長と大曽根先生がいたときに学ばれていたのですが、いろいろな理由があってアメリカに移住することになったわけです。

長い間アメリカで生活をしていろいろ苦労もあったと思いますけれど、そんな中で私と会ったわけです。私はとてもびっくりしました。なぜかと言うとお二人とも英語はできない、読むこともできない。それでも周りとのコミュニケーションは一生懸命、仕事と技術に自信を持って一生懸命生きてこられたわけです。貧しい生活ではなくき

ちんと立派な生活をしているのです。

仕事もして収入も得て、ニューヨークマンハッタンに家も建てて車も買ってきちんと生活されている方でした。以前はアメリカでもたくさんの差別があったと聞いています。その時代に移住してきちんと生活されているということにとてもびっくりしました。

山地さんがどうしてこんなにきちんと生活ができているのかということに疑問、興味を持って何回もお会いしました。話を聞いたことを自分なりに書きまとめて何とかしたいと思いましたが、なかなかその手段がなかったのです。それで、トヨタ財団にお願いしたのです。高齢ろう者のアメリカ生活史をまとめて本にしたいという希望が認められて1200万円の助成金がおりました。交通費や謝礼などの準備が揃ったことで実行するメドがつきました。

２年間で山地さんと会ったのは34回。１回つき２時間ずつ聴取しました。日本に帰って気づいたことですが、自分としても随分頑張ったなと思いました。普通はこのようなことをしようと思っても３～４回くらいで終わるでしょうが、34回もインタビューをしてきたのは自分でもすごいことだと思います。

個人の歴史、その人の生い立ちについてまとめるということは簡単に分析できることではないのです。何回も話を聞きそれを持ち帰り調べると言う作業、これしか方法はないのです。聴取は８ミリの映写機で取りましてテープはズラーとたくさん保存してあります。映っているのは日本とアメリカの両方の手話を使っている人だということ。

たまたま運が良かったのは、私もアメリカの手話ができたので苦にしませんでした。昔の大阪時代の話は日本の手話で、アメリカに行ってからの苦労などはアメリカの手話でと、二つの手話を駆使して取材が進められたわけです。

私自身も『なるほど』とか『イエス』とか使い分けをして進めました。彼はアメリカに行かれたあとは、日本人に会ったことがなく私が初めてでした。本当に久しぶりに日本の手話で話したのですが、私の手話が分からないと言われるのです。

山地さんが使う大阪の手話は古い大阪の手話なわけです。例えば、『一週間』という手話も表現が違うんですね。７を前でまわすようなしぐさであるとか、古い大阪の手話を表してくれるのです。学校の表現も違うのです。日本に帰ってたくさんの資料を調べるにあたり、大阪の学校に行って個人情報などの問題もあるのですが、許可をもらっていろいろ調べることができました。

フィールドワークみたいな作業になるのですから、ルールを守ることも大切です。彼の妹さんは彼より先にアメリカに渡って生活していました。その後彼が移住したのですが、アメリカ入国査証を受けとる条件が厳しくて大変だったらしい。入国できる条件を満たす書類を妹にお願いするために、新しく買った８ミリカメラで手話での会話でやりとりを撮影したフィルムを、アメリカにいる妹に送りました。家族も妹もみんな文を書くのが苦手なので、手話ならと思いついたものです。渡米する日のやり取りを撮影したフィルムが今でも保存されているわけです。そのフィルムはとても貴重なものだと思います。

もう一つ、彼から話を聞くというときにはきちんと契約をすることが必要となるのですね。覚え書きを取ることが必要です。アメリカでは裁判なども起きていますが、「友達だから」という安易な気持ちでいては駄目なのですね。問題も文書で

契約することになっているのです。撮った内容も勝手に使っていいわけではないです。きちんと契約をして、公開する許可を得る必要があるわけです。

アメリカで撮った内容も、こちらで勝手に本にして販売するわけにはいかないのです。もし相手を傷つけることがあれば、裁判になって訴えられるということもあるのですね。それをきちんとするということをお互いに確認して作業を進めたわけです。インタビューをするのはお願いをする立場ですから、もしまずいことを起こせば断られてしまいます。やっぱり理解しお互いに気遣いをしながら行ってきたわけです。

インタビューした際に言われたことを、そのまま記録をしていくことが大切です。自分で勝手に変だと判断してはいけないのです。内容が食い違っていても、それはそのままにしておかなければいけないのです。記憶が変わっていく理由があるわけです。例えば彼にとっていやなことだったら、記憶は事実と食い違うものとして残ることもあるわけですから。言われた内容をそのまま整理をしていくことが大切です。普通は口述というのを、ろう者の場合は手話述ということになります。信頼関係が保てたので継続することができました。その中から大切なことをいろいろ学びました。

４つ紹介したいと思います。学校の中でいろいろあった行事の中に、「山に行く」という計画があって、案内書に持参物など細かく記述してあるのですね。家に帰って母親に（母親もろう者）この紙を渡しました。朝、母と一緒に待ち合わせの場所に行ったのにだれも集合しないのです。

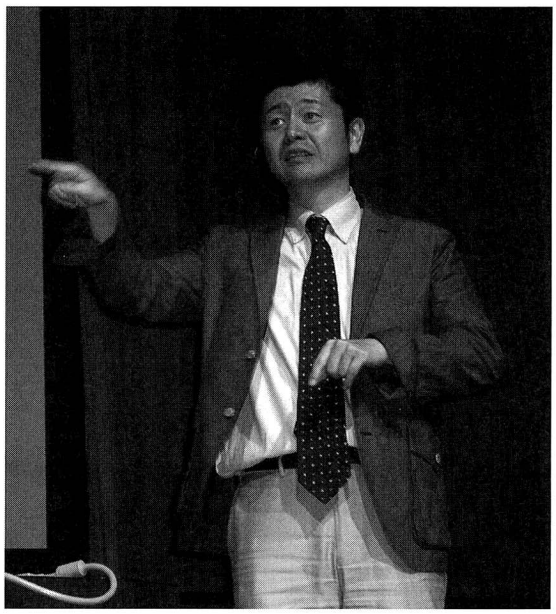
家に戻ると父親が怒ったのです。「お前は文章が苦手なことを分かっているのに、昨日紙をもらったときになぜ先生に聞かなかったのか？文章よんでもわからないだろう。手話で内容を説明してもらう必要あるんだ！その上で母親に知らせる必要があるんだ。なぜ文章で指示を出したのか」。

すごく怒ったのですね。もしそのようなことで文章の内容が分からなければ、死んでしまうこともあるんじゃないかということで大変怒ったのです。

結婚問題についてですが、昔のことですから両親がろう者の場合結婚相手がなかなか見つからないのですね。

どうしてかというと、彼の両親がろう者だという事を皆が知っているのですね。もし彼と結婚した場合に「聞こえない子供が生まれるんじゃないか」といううわさを流す人もいるわけです。他の学校に転向してもその話が人づてに伝わってくるんですね。大変苦しい思いをしたようです。そしてやっと結婚することができたとそうです。

一番苦しかった話は、戦争についてです。大阪は空襲がありました。あちこちで空襲にあいましたが、空襲警報が鳴ります。家族全員がろう者ですから、隣の人がわざわざ来て声をかけてくれるんです。しかも家の中まで入ってきて「逃げよう、逃げよう、逃げなきゃあかんだよ」と言ってくれるわけです。そのままでは危険ですね。なぜなら急がなくてはならないんですよね。



警報を聞いたらすぐに逃げなくてはいけないのに、その隣の人は警報を聞いてからわざわざ知らせに来てくれるんですから大変なわけです。それで何かいい方法はないかという話になり、部屋の戸にロープをつけてロープの先に重い石を結び付けました。扉が開くと石が持ち上がります。閉めると下に落ちてドンと振動がするわけです。そうすれば何か起きたということがわかるわけですね。

そこで、寝室と食事をするところにその仕組みを作りました。その後は空襲警報がなったら隣の人が扉を開けたり閉めたりするだけでわかるよう

になり、中にいる彼らに伝わってすぐにできるだけ早く防空壕に逃げることができたのです。終戦となり日本は負けましたね。昼間の郵便配達の人が来ますよね。郵便が来たことがわかるようにしたいので、食事の部屋には呼び鈴と同じようにしました。寝室についてはそれはいらなくなりましたから、戦時中につけておいた石の仕組みは、食事をする部屋にだけ残したということです。

健聴者の話からは「戦争が終わってからやっと電気も明るくつけることができるようになりました」という話をよく聞きます。戦時中は電球に布をかけて暗闇の中で暮らしていたのですね。もうそれをしなくて済むようになりました。彼の場合には緊急に知らせる仕組みを使わなくて良くなったという話で、健聴者とろう者の歴史の違いでもありますね。

ある日のこと、家族で食事をしているときに突然石が持ち上がりました。石は持ち上がってゆっくりゆっくり動くわけです。泥棒かと思ってこっそり外をのぞいてみると、ろう者の友達が終戦の後で食べ物がなくてこっそりと彼の家に訪ねてきたわけです。かくれなくていいからと言ったのです。友達から「どうして来たとわかったの？」ときかれて「こういう仕組みがしてあったからお前が来たのがわかったよ」と言いました。でもやはり、食事をするところに石の仕組みを使っていたというのは一つのろうの文化だと思います。

ろうの文化、例えば肩をたたいて知らせるとか、光をつけて知らせるとかがありますね。今話したろうあ者が作った何か一つのことからいろんな新しいものが生まれてくるわけです。それも全てろう者の文化だと思います。

４つ目は生命保険加入の問題です。生命保険に加入したいと思いましたが、当時のアメリカではろう者は加入できませんでした。日本も同じです。日本の場合はまず協会に相談・問題提起をして、そして「民法を変えてほしい」というふうに活動をしますが、アメリカの場合は運動とは別に会社を設立したわけです。「加入できない？わかりました。ろう者が加入できるろう者だけのための会社を建てましょう」というのがアメリカの考えです。

山地さんもろう者も加入できる生命保険の会社があると聞いたのでそこに訪ねました。「日本から来たろう者です。加入したい」と言いました。「ちょっとまってください。上の人と相談します」と言われました。そうしたら「あなたは入ることができません」と言われたので、「なぜですか？」と聞いたら「君アジアの人だから。黄色人種だから」と言われたそうです。非常に腹を立てました。「そんなのおかしいじゃないか。同じろう者なのに入れないなんてどういうことなんだ」とずいぶん話をしたようです。

そしてやっと認められて山地さんはアジア人として初めてその生命保険会社に加入しました。そのあとやっと何年かしてから黒人にも加入できるようになったようです。世界は皆友達みたいな考え方では駄目なわけです。

先ほどの「英語が苦手なろう者がアメリカに移住して生活できた」という報告。やっぱりろう者の家族にうまれたこと、手話を禁止しなかった大阪市立聾学校で育ったこと、それが全ての元です。

そういう環境でろう者としての行動の取り方や物事の考え方を自然に身につけたこと、手話の使用を通して両親と先生からろう者として生きていく上での知恵や技術、すなわち日本で吸収した社会技術を持っていたからこそその応用としていろんな困難を乗り越えることができたのだと思います。

やはり小さいときからの手話の獲得はとても大事だと思いませんか？もし手話がなければ会話もわからない、言葉も不足してしまう、知識も経験も不足したまま、こういう状態で移住したら生活はできませんよね。裁判であるとか殺人事件だとか危ないことはたくさんあるわけですよね。もし何の知識もないままアメリカにいっていたら、まともな生活はできなかったと思います。

その研究の内容について仮説を書きました。一番大事なことは何かと言うと、ろう者の成功の影には健聴者の協力があるということですね。例えばろう者がいろんなことで成功しました。僕が頑張ってやってきた、ろう者なのに頑張った、すばらしいな、大変だっただろうと言うことをいいますけれど、必ずその裏には健聴者の支援があったわけです。健聴者の協力なしでろう者だけで何かを成功させようというのは無理なんですね。

これまでの歴史の裏を見ると、必ず健聴者が何かしらの支援をしています。健聴者の支援をもらいながらともに生きていくというのはとても大事だと思います。そのことも山地さんのお話の中から学んだことです。そういったお話をまとめて本を作りました。この本を出版するときに、山地さんに承認してもらって出版したわけですけれども、僕が書いたので印税をいただきましたが、全部山地さんのほうに渡しています。本の売上金は全て山地さんの生活の支援になっています。

筑波技術大学では、１年・２年・３年、各50人ずつ、来年また50人が入って、全部で200人になりますが、そういった学生に対して、一年時は学生の様子を見る。ろう者と難聴者の様子はまちまちですね。手話がうまい人下手な人、口話だけで話す人もいますし、手話を駆使する人もいます。

そういった学生が集まって交流できるのかという疑問はあるのですが、集まってから私はコミュニケーションの方法を教えています。二年生になると、聴覚障害Ａ・Ｂ、聴覚障害論、聴覚障害保障教育法、聴覚障害文化論…聴覚障害がついた科目を学びます。私は聴覚障害・・・というのは抵抗があるのですが、今後大学の中で名前を変えていかなければならないと思っています。

それはさておき聴覚障害論Ａの講義内容は、運転免許、薬剤師など、そして情報保障、コミュニケーション保障とか手話通訳の問題、アジアの現状などろうあ運動の内容、成果、歴史をまとめて講義しています。みなさんは、ろうあ運動というものは、ろう協会や青年部で学ぶのですが、それと違うのは大学で何も知らない学生が集まってくるわけです。その学生たちにろうあ運動とは何かということを教えています。ですから、いい仕事をもらったというふうに思っています。もし全日本ろうあ連盟本事務所の６年間がなかったら、大学で教えることはできないと思います。６年間で得たことは大変貴重な体験でした。

学生にしては「大杉先生の講義はちょっと難しいな」とか「興味がないな」というふうに言われるのですが、「そんなこと言うと試験で落とすぞ」と言うと、仕方なくというか頑張っているみたいです。それでも頭に無理に詰め込むということではなくて、自由に勉強をしてもらうためにも特別な課題を出しています。自分で自由に、自分が生まれてからの年表であるとかいろいろなことが起こったこととか、ろう者の運動は何かとか、テーマを決めて年表を作らせています。

そういったことを広めていっています。結果、自分でテーマを決めて本当にびっくりするようなテーマを決める人もいますが、とても多種多様なテーマです。

例えば「聾教育」。簡単なテーマは認めないということでテーマは幅広いです。例えば「聾学校」「聾の手話」「教育の指導法」などのテーマを細かく作っています。「調べ方がわからない」と学生に言われるのですが、「新聞を調べなさい」とか「ホームページを見て調べなさい」「自分の足を使って調べなさい」と学生達に言います。最後に「補聴器について調べろ」と言ったら難しいですね。ところが、この学生は踏ん張ってインターネットのホームページからいろいろ調べて抜粋して、1650年から細かく絵や写真をとりこんで、レポートを106ページ作成したのです。耳にあてたラッパのような形の補聴器、他にいろいろな形をした補聴器を調べてくれました。ホームページでいろいろ調べてすごいなと思います。

ろう者の場合、小さいときから補聴器をつけている場合が多いのですが、補聴器が何かということについても調べることが非常に大事になるわけですね。つまり、学生の歴史への関心は非常に高いですね。

歴史について一生懸命頑張って調べたいという気持ちを持っていますが、残念ながらろうの歴史の写真などは資料としては本当にないのです。どこで探せばいいかわからないわけです。そういう問題があります。学生のレポートの最後のコメントを見せてもらったことがあるのですが、はっきりした問題点がわかります。

「口話と手話について調べたかったが資料がなかった」

「いい経験をしたが資料が本当に少ない」

「もっとろう者の歴史を調べたい気持ちを持っているので、今後に向けて発展させていきたい」

学生は18歳から22歳くらいまでですね。皆さんの後輩になるわけですが、情熱を持って調べたいという気持ちを持っているのですよ。今の気持

ちをもっと発展させて、ろう者の歴史をいろいろこしらえていってくれるのではないかと思います。

未来を拓く聾史研究の大きな可能性がここにみられると思います。まだ教え始めて一年もたっていませんが、学生と交流しながら、ろう者の歴史とは何かということに対して興味を持っているので、そういったことを報告しながら、いろんな歴史の内容を調べてきちんとまとめて資料にしていきたいと思っています。

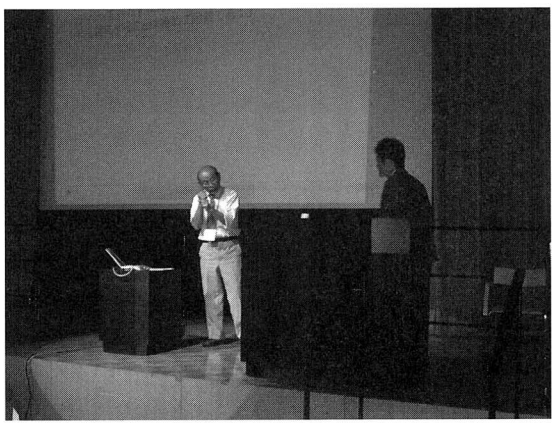
まずは、一人一人が簡単なことでもいいから歴史を学んで欲しい。古い資料はどこにあるかわからないと思いますが、まず高齢のろう者と交流をしながら、昔の経験、仕事についてなどをいろいろ質問する。こうしていろんな資料を集めたり映像にしたりということができるのではないかと思います。

歴史についていろんな歴史的分析がありますね。例えばテーマとして、『アイデンティティーの確立とは何か』。昔のろう者のアイデンティティーはどのようにして作っていったのか、階級社会の中でのろう者の差別はどうなのか、ずっと昔にさかのぼって歴史を調べてみて今までのことを改めて分析することも必要だと思います。

最後にお願いしたいのですが、ろうに関する資料センターの設置を切望しております。いろんな文献や資料や写真など、昔の補聴器とか赤ちゃんが泣いたときのベビーシグナル、昔は大きな機械があったのですが、そういったものも集める必要があると思います。あとはホームページ上でいろいろなものが収集できますが、収集するための資料が欲しいわけです。そういったものをきちんと保管する場所が必要になってきます。

例えば、富山にも情報提供施設ができましたね。そういったところにいろんな歴史の展示をしたり、例えば昔の戦争時代の聾教育の様子などを順番に展示したりして、あちこち巡回展示ということもできます。「聾史百科辞典」（仮）も作ってほしいですね。アメリカ、スペインなどではこういった本があります。カナダにもあります。とても分厚くて立派な本です。本当は持ってきたかったのですが、とても重いので持って来ることができませんでした。

日本の場合、視覚障害者はありますが、ろう者に関してはないのですね。誰かやろうという人、あるいはグループを作ってぜひ百科辞典ができたらいいなというのが僕の夢の一つです。大変だというのではなくてホームページを使って資料や年表、データを作っていくのです。

その前にろうの歴史センターを作ることです。センターを作ることができれば当然辞典の作成作業もはかどれると思いますね。これが僕からの意見、アイデアです。無理だというのではなくて皆でやろう！と思って力を合わせれば成功することができると思います。

最後に「日本聾史学会」のますますの発展をお祈りします。また先ほどお話をした通り、皆さんと一緒に歴史を学び想像力を高め、正義感を持って社会の変革を目指して、そのために皆さんと一緒に頑張っていきたいと思います。そのためには僕の力はわずかですが、協力をしたいと思います。短い時間でしたがご覧になっていただきありがとうございました。